直接行動論

130

一

ことはたちになる某々という女が、茨城県下の宿屋五、六軒に奉公して、どこでも淫売を強いられるつらさに堪えられなくなって、とうとう府下大久保の慈愛館に泣きすがって来た。

慈愛館というのは、多くはそういったたちの女を救う、キリスト教の一設備である。

この慈愛館と多少の関係のある、矢島揖子女史を会長とする婦人矯風会では、この事実を某—という女一人の問題ではなく、すべての職業婦人に関する問題だと見た。そしてこれを機会に、主人が女中を、上役が女工を手籠めにするというような行為に対する制裁の記録を、法律の上に求めようとした。

二

が、この事件は、昨年五月以来、水戸の地方裁判所から東京地方裁判所、次いで控訴院、大審院へまでも訴え出たのだが、どこでもついに「軽微な問題」として取りあわれなかった。

そして最近、矯風会本部では、おもなる会員が集まり、「日本には処女の貞操を保護する法律がない」と認め、この事実を全国の婦人に公表して輿論を喚起することにきめた。同会幹事久白落実女史は、この問題について、新聞記者に話して言う。

「今までは裁判所にすがってできるだけ闘って見た。がその結果は無効だった。そして私達は判然と自覚した。日本の幾百万かの処女は、貞操について、法律の保護を受けることができない。自分の貞操は自分で保護しなければならない。で、私達はこのことを天下に訴えて、女性の自覚を促そうと思う。」

三

婦人矯風会が、はたしてこの直接行動論に徹底することができるかは、疑わしい。現に彼等は、こんどはそれを議会の問題にしようとして、騒ぎ廻っているらしい。が僕等は、ヤソの、お嬢さんやお婆さんたちにそれを責めるような野暮ではない。そこまで働いて、そしてうわべだけでも、とにかくそこまで悟って来たのは彼女等にしてはもう大出来なんだ。

けれども、僕が今特にこの問題をかかかってここまで書いて来たのはそれについてわれわれ等

働者がお互いにもう少し考えて見たいと思うことがあるからだ。

四

矯風会のお嬢さんやお婆さんたちは、別に法律で保護されなくても、その貞操を守ることができる。彼女等は、結婚という一種の淫売の外には、滅多に淫売を強いられることはない。滅多に手籠めに会うことはない。またそんなことがあった日にゃ大変だ。世間はたちまちに大騒ぎになる。

女中や女工の、労働者の場合とは、まるで違う。

手籠めといえば強姦だ。そしてこの強姦には、確かに、それを制裁する法律がある筈だ。けれども、女中や女工の労働者の場合には、恥かしいとか世間ていとかいうこと以外の理由から、それを訴え出ることのできないのが、どんなに多いだろう。法律があつたって何にもならないんだ。

五

なぜだろう。

一言で言えば、彼等には力があつて、われわれにはそれが無いからだ。そして法律はこの力

の味方であるからだ。

女中や女工だつて、淫売を強いられたり手籠めに会つたりする時には、ただちにその本人たちが騒ぎ出すがいい。

大ぜいで騒ぎ出すということは、弱いものを持つていたただ一つの力である。

五人でも六人でも、その宿屋なり工場なりにいるものが、みんなして騒ぎ出せば、いくら主人でも上役でも滅多に手を出せるものではない。

こうして、何よりもまず本人が、自分で自分の力を確かめて行く。そしてその力で自分を守りかつ育てて行く。それを、どこまでも自分が勝手に推しすすめて行ったのが彼等なんだ。

六

どこまでも自分勝手に推しすすめて行くんでは困る。僕等は彼等のその真似はしたくない。けれども、彼等のように法律があるやうとあるまいと、勝手に自分を守りかつ育てて行くことができるようになるためには、やはり彼等を真似て、自分で自分の力を確かめて行く外はあるまい。

そして、そうするには、前にも言った僕等に残されたただ一つの力を、養いあげて行く外に仕方はない。

法律があっても、警察があっても、また裁判所があっても、力で処女の貞操を侵そうとするものがある時には、やはりその女自身の力のほかにはそれを防ぐ何ものもない。

政府の道具共

今、政府の過激思想取締法案に対して、だいぶあちこちに反対の声があがっている。しかしそれは、はたしてほんとうに反対なのだろうか。試みにその反対の声なるものを聞いて見る。

無政府主義や、共産主義や、その他の朝憲を紊乱するような思想の宣伝を許せとは言わない。その宣伝や実行に対して厳罰を加えなければならんことは勿論である。ただその条文が曖昧だ。あまりに抽象的だ。役人の手心一つで勝手放題な取締ができそうに見える。それではわれわれ善良な新聞雑誌記者や学者が間違っ引っかかる恐れがある。そんな法律はいけない。

まあ、大がいはこうだ。もっと体裁のいいようなことを言っているものもあるが、詮じつめればやはりまずこうだ。

反対どころじゃない、立派な賛成だ。そしてこの善良な新聞雑誌記者や学者等は、そのいわゆる反対によって、この法律を通過させる有力なお手伝いをしていなのだ。

彼等のいわゆる反対運動が盛んになって、ついに、それが効を奏したと仮定して見るがい。はたしてどうなるか。要するにそれは今回の法案の修正である。彼等善良な新聞雑誌記者や学者等のめったに引っかかることのない、しかし無政府主義者や共産主義者やその他の直接行動論者に対して容赦のない、厳罰である。

が、それだけならまだいい。それは彼等のいわゆる反対があってもなくても来ることであるのだろう。しかしそれと同時に、これこそほんとうに彼等のお蔭で、もう一つ来るものがある。それは、かくしてできあがるだろう法律に対する、世間の祝福である。

あの乱暴な法律案が、絶対多数の政府党によって、あのまま無事に通過するとする。誰が、どんな馬鹿者が、そんな法律に衷心から賛成しよう。で、政府はきっと、民主主義者とも言われているいわゆる進歩思想の人々の持ち出すだろう修正案を、喜んで受け入れるに違いない。彼等でさえ賛成したのだからということが、一般世間を瞞すのに一番いい方法だからである。

この点において僕等は、明白に僕等の敵であろうとする政府そのものよりもっと、自分だけいい子になって政府の道具になろうとする、彼等進歩主義者を憎むものである。

政府がどんな無茶を僕等にしようと、僕等はそれを政府当然の仕事として受け入れる。僕等はただそれに対する僕等自身の態度をきめればいいのだ。

けれどもこのいわゆる進歩思想家等に対しては、民衆が瞞されやすいだけ、それだけ僕等は

黙っていることはできない。

まず彼等から叩き倒すんだ。

靈魂のための戦士

「個人の生涯におけると同じく、民族や人類の生涯においてもまた、その生涯の回転期ともいべき出来事がある。そしてこの出来事は、マリアがその中に神の出現を見たという暴風のようなものではなく、むしろようやく知覚されるかされないかぐらゐの朝の微風に似たものである。騒がしい音も立てない。無暗と何かに打ちつけもしない。目にも立たない。」

これは僕が今ここに紹介しようとする靈魂のための戦士すなわちドウハボルのために、トルストイがその心血を注いで書いた小冊子『助けよ』の結論の中の一節である。

トルストイはなお続けて言う。「ローマ人は勝利者の入城を歓迎迎えた。しかしかの新しい教えを説いたガリラヤの大王の子には見むきもしなかった。それと同じように、今日でも、全世界の人々は植民地戦争や金銀貨幣本位説の問題には熱中している。しかしドウハボル教徒がその信仰のために闘っている偉いしかし隠れた努力についてはまったくかえり見もしない。」

かくトルストイがキリストの再現とも見た、そしてその活動の中に人類の歴史の回転期を見た、このドウハボル教徒とは何ものであるか。

ドウハボル教は、キリスト教の一宗派である。ロシアにはこの宗派の数が非常に多い。その多くは、十七世紀にニコン総教主がロシアの正統派を建てた時に起った。分裂から生じたものである。ニコンはギリシャ語の諸文書によって従来の聖書に修正を加えた。そしてこの修正が国民的反抗の猛烈な運動を惹起したのであった。しかしこれらのいわゆる旧信者以外にも、正統派に反対する他のいろいろな宗派が絶えず起っている。

正統派は極力これらの異宗の圧迫に努めた。正統派の仕事といえは、ことにそれがニコンの改革によって確立されて以来は、ただその地位の維持に努めるだけのことであった。正統派には、その創り上げた教義というほどのものは、ほとんど何もない。正統派の神学には、異宗に對する論難攻撃の外には、ほとんど何にもない。かくして正統派は、この点において、自然にロシア政府の方針を助けることとなった。

当時ようやくその基礎を固めて強大な近世的国家を建設したロシア政府は、その国内におけるあらゆる意味での自由な独立的分子の排斥に努めていた。ついにピョートル大帝は、正統派を国教とすることによって、その中央集権的政策の完成を謀った。あまりに自主的な総教主の

職を廃して、教会會議の制度を設け、その會議員はすべて皇帝の任命によることにした。教会が国家行政の一部門となったのだ。

ドウハボルは、その信仰簡条の性質上、この教会と国家との二種の権力と衝突しなければならなかった。

しかしこの宗派の最初の思想はまったく宗教的のものであった。キリスト教についてのその特殊な解釈の仕方であった。そして漸次に、周囲の諸事情に応じて、種々なる方面にその思想が適用され拡大されて行ったのであった。そしてついに、最初はまったく神学的の、やがてはさらに政治的および社会的の、その教義が形づくられ確かめられたのであった。

ドウハボル教徒の特徴は、何よりもまず、正統派の儀式づくめに対する反対であった。彼等は宗教を儀式の中におしこめることを斥けて、神は靈魂たましいの中でのみ崇むべきものであると主張した。ドウハボル教の最初の教義はその信徒等が一七九一年にカホオフスキー知事に呈出した報告書によりて、その大体を明らかにすることができる。

靈魂は肉体よりも先きに創られたものである。三位一体は知恵と意志と記憶との三要素より成る。しかるにある靈魂等が罪に陥って、この世界の創造される以前に神から離れてしまった。神は、それら靈魂の前身の記憶を取りあげて、この地上に追放した。そして神は、それら

の靈魂を各々自分の知恵と意志との欲するままに、悪魔の誘惑のままに、この世界に打棄てて置いた。……されば人間の肉体は、靈魂に取っては、一時の牢獄に過ぎない。そして靈魂は、この肉体の中に止まっている間は、その前身の記憶を呼び起すこと、すなわち神の姿を取り返すことを、その唯一の目的としなければならない。そのためにはまず物質から解脱しなければならぬ。最初の人間には宗教上の儀式も制度も何にもなかった。彼等はただ聖靈によって照らされていた。しかるに、その後、悪の進むに従って、罪を圧えるためのいろいろな戒律をつくり、信仰をすらも一つの法典に築き上げてしまった。かくして靈的存在でなければならぬ筈のものが、たとえば聖書とか儀式とかいう外的の形を具えるようになった。ついに最初は「世界の天然自然の中に」拡がっていた神の知恵が、イエス・キリストの中に体现された。もっともこのイエス・キリストは、マリアの体内で物質的に発育されたごとく、各人の中にも神から「天降り」して来る。われわれドウハボルが自らそうでありたいと望んでいる神の子等は、決して法律や教理問答をつくらぬ。「あたかも日出でて月や星の消え失せるごとく、神の子等は、自等の中にキリストを持ってはもう削除も何にも要らなくなる。」神の人々は、使徒パウロの言ったごとく、生ける殿堂である。

彼等は宗教の真実とその真実の蔽われている表象シムボとを混同することがない。そして彼等はそれにはきわめて巧妙な比喩的説明を下している。彼等の讃歌の一つに言う。

- 汝はいかなる十字を信ずるか。
- 任意の貧困の十字を。
- 汝の教会とは何ぞ。
- 信仰の一致。偽らざる愛。真の功德の教訓。神秘なる聖徒の尊敬。
- 汝に殿堂ありや。
- わが肉体は神の殿堂である。わが靈魂は神の姿である。
- 汝に祭壇ありや。
- わが祈禱は自ら神の御許にまで進んで行く祭壇である。

一一

ドウハボル教の起原は明瞭とは分らない。とにかく十八世紀の中頃に正統派や旧信徒等の喧ましい形式主義に対する反動から起ったものには相違ないが、その歴史的諸事情はすこぶる曖昧朦朧としている。

ドウハボル教徒自身は、アナニウスとアザリアスとミサエルとの三人を、その教祖だと言っている。この三人は、バビロン王ナブシヨドノゾルの肖像を拝むことを拒んで、王のために大竈の中で焼き殺されたという、旧約聖書の中の人物である。ロシアにも、一七三三年に、自ら

キリストだと名乗って火炙りの刑に処せられた、フォマ、ルブキン、およびスウストラフという三宗派の教祖がある。そこで、ドウハボル教は実はこの三宗派から出たものでその宗派の記憶と旧約聖書の中の伝説とが結びついたのではあるまいか、と言う人もある。しかしこれも信ぜられない。

もつとも、ドウハボル教の教義の組織もしくはその発達のうえで実際にある影響を及ぼした、他の三人がある。

トヴェリテナフという医者はその一人であった。この医者はドウハボルというよりもむしろモラカン宗の人であるが、一七一四年にカルヴィン教を説いたというところで処刑された。次には一七四〇年か五〇年頃かに、たぶんクエーカー教徒だろうと思われるプロシヤのある下士官が、小ロシアに伝道していた。そして最初の疑いもないドウハボル、シルヴァン・コレスニコフは、この下士官の弟子だと言われている。コレスニコフはイエカテリノスラフ州の無学な一小商人であった。自分の周囲に幾人かの信者を集めて、そのずいぶん老年までの生涯の間を、熱心な伝道に暮した。その中心思想は、クエーカー教の万人平等説にあっただけ。それとちようど同時頃に、スカフォラダという小ロシア人が、村から村に渡って、小作小屋の中には入り込んで、農民達の間とその新宗教を説いていた。彼はカザック兵の息子であったが、当時のロシアの学問を修め尽くしてさらにヨーロッパのあちこちに旅行して、多くの哲学者や宗教家

とも知合いになっていた。その説に言う。「キリストは長い祈禱の中にも、断食の中にも、またいろいろな儀式の中にもいるのではない。……キリストは死人の国に居るのではない。キリストは生きて居るのだ。だから生きて居る人の中にキリストを求めなくちゃならぬ。……もしキリストがわれわれ自身の中に見つからなかったら、ほかのどこを探しても無駄なことだ。」ここに注意して置かなければならぬのは、この三人もしくは四人が、いずれもその思想の起原を西ヨーロッパに発していることである。トヴェリテナフはカルヴィン派である。プロシヤの士官およびコレスニコフはクエーカー派である。そして最後のスカフォラダは自らチェック派に属するアブラハムの子孫だと言っている。

元来ロシアの本当に国民的な宗派は、十字の切りかたとか讃歌の歌いかたとかいう、礼拝や儀式についての意見の相違から生じたものである。したがってその宗派は、おのおのその特殊な仕方に従って、この外的な礼拝や儀式をいろいろに変えたり複雑にしたりこそすれ、それをさらに単純にするとか、あるいはまったくそれを無視するとかいうことはしない。さればドウハボル教を生んだ最初思想は、西ヨーロッパの新プロテスタント教の合理的思想から出たものと思われる。しかしこのドウハボル教も、その後の発達の間にまったくロシア的のものとなった。一体ロシアの諸宗派は、その教義を極端まで進めて行って、そしてその主張を實際生活のあらゆる方面に適用するという、あくまでも徹底した態度に出る。どんな障礙の前にも退かない。ばかばか

しいほどに、しかしまた神々しいほどに、その信仰の結果の奴隷となる。

ドウハボル教の思想は、シルヴァン・コレスニコフがその教えを説いたイエカテリノスラフ州から、さらにタンボフ州にはいつて行った。そしてこの宗派はそこでたちまちの間に拡がった。その最初の首領はポビロヒンという名の金持の商人であった。彼は言う。真理は聖書の文字の中にあるのではない。「生命の書物」すなわち良心の中にあるのだと。この頃からドウハボルはその教義を文書によって説くことを拒んだ。「生命の書物」にはその時々々の事情に応じてできた、いろいろな物語や讃歌などがある。彼等はそれをその子供達に幼時から教えこむ。彼等は神に選ばれた民だという無邪気な誇りから、世間的知識を侮蔑して、決して学校を設けない。「生命の書物」の外には彼等はまったくの無知である。

ポビロヒンの讃歌の一つに言う。「水による洗礼はわれわれの靈魂に必要なものではない。われわれの靈魂の洗礼はわれわれ自身の中の神の言葉を受け入れることである。……パンは麦粉をもって、葡萄酒は葡萄の実をもって造られる。そんなものはわれわれの靈魂に要はない。われわれは、われわれの罪が許されんがために、イエスの恐ろしい、しかし元気づける、不死の、神聖な苦難ツラシムを嘗めることによって聖餐を受ける。」

ポビロヒンは、その熱烈な信仰のために、ついに一家を挙げてシベリアへ追放された。そし

てその後継者となったカブウステインは、非常な雄弁と聰明と美貌とを具えた、ドウハボル教の予言者とも言うべき人であった。ポビロヒンはキリストが化身して再びこの世界に現れるということを考えていた。カブウステインはさらにこの説を敷衍して、それを自分の一身一家のために利用した。すなわち自分をキリストの化身だと称えて、この特権が自分の子々孫々に世襲されるものと主張した。そしてその子孫は代々キリストの化身としてドウハボル教徒の牛耳を握ることとなった。

三

かくして十八世紀の終り頃には、イエカテリノスラフ州およびタンボフ州は勿論、ドン河の流域地方や、南ロシア地方や、モスクワ市にまでも、その教徒が散らばった。そしてその教義は、商取引ぎや追放人などによって、さらに遠くまで拡がって行った。ドウハボル教徒の追放人等は、リガや、フィンランドや、エゼル島や、アゾフや、アルハンジェルや、イルクウルラや、またはコーカサスなどに流されて、そこでその思想を伝道した。

そしてその頃に、すなわち一七八五年に、初めて、彼等はドウハボルという名を得たのであった。イエカテリノスラフ州の大教正アンブロアズが、彼等を嘲笑的にドウハボルと名づけた。大教正は、この言葉が戦士というのと靈魂というのと二語からできているので、それを

靈魂に逆らう戦士という意味に使ったのだ。しかるに教徒等の方では、それを靈魂のための戦士という意味に解釈して、喜んでその名を受けたのであった。

カテリン第二世の政府がこのドウハボル教徒に対する迫害を始めた。一七九〇年に、ペレコプの裁判所が、三十四名の靈魂のための戦士に、次のごとき宣告を下した。「被告等は教会の命令を奉じない。で、他の人々を彼等から保護するために、また彼等が教会や聖餐や諸聖徒を否定するのを罰するために、まず公衆の前で彼等の中の男には強鞭三十打を、女には弱鞭四十打を与える。そして被告等をシベリアに追放して、その財産を没収する。」

次のポール第一世はさらに嚴重な迫害を加えた。このポール第一世とドウハボルとの最初の衝突について、ゲルツェンの語った面白い挿話がある。皇帝が即位式のためにモスクワへ行った時であった。ドウハボルの長老の一人を宮中に呼んで、この凝り固まりの宗旨氣違いが何を言うか聞いて見ようと思った。老人は、その宗派がクェーカーから伝えられた慣例に従って、帽子を被ったまま皇帝の前へ出た。皇帝はこの侮辱に辛棒がでないで、いきなり怒鳴りつけた。「貴様は今誰の前にいるか知っているか。」老人は平氣な顔で答えた。「よく存じています。お前さんはポール・ペトロヴィッチです。」皇帝は即座にこの男をシベリアに追放して、その村の四方から火をつけることを命じた。しかし誰もこの命令の実行をあえてするものがなかった。翌日、皇帝は仕方なしに思い直して、村を焼き払うことだけは止して、老人をある僧院

に幽閉した。もっとも皇帝はその僧院の正統派の僧侶等がこの邪教徒を虐待するものと期待していたのだ。しかるにこの期待もまふと外された。老人は僧院の中で聖者だという評判になった。ついにはその友人等が監房の中はいり込んで、老人に白衣を着せて、その監房の周囲にも白い布を張った。そしてこの老人が死んだ時には、その死骸が本当に聖者の死骸のように鄭重に持ち出された。

なおこのポール第一世の治世の間には、多くのドウハボルが、「官憲を…侮辱…して、この地上には善人を保護し悪人を処罰するために神から命ぜられた別の権威があると信じている」ために終身懲役に処せられた。

その次のアレキサンドル第一世が即位してから、ようやくドウハボルの地位が平安になった。一八〇一年、皇帝は追放者等の罪を赦して帰国を許した。そしてその前にまず二人の牧師と一人の裁判官とを派遣して、その信仰の真面目な調査を命じた。その第一の問題は彼等が皇帝に忠誠を尽すという宣誓をするか否かということであった。彼等は答えた。「善良な皇帝は神の恵みであり、暴虐な皇帝は人間の罪悪に対する神の罰である。」次にはキリストの聖像を持って来て、このキリストを信ずるか否かということであった。彼等は答えた。「それはキリストではありませぬ。ただ板に絵の具を塗っただけのものです。」最後の問題は税金を納めるか、

また兵役につくか否かということであった。彼等は答えた。「私どもは乞食です。何で税金なぞが払えませぬ。また私どもが何で兵役なぞに出られませぬ。私どもの間にはもう老人と子供と不具者かたがしか残っていません。もっとも昔は、私どもも外の人達と一緒に皇帝のために尽しました。しかし今はもう皇帝の思うままになさるがよいのです。私どもにはもう何にもできませんぬ。」役人等はこの調査の結果を皇帝の許にもたらした。そして彼等は相変らず謀反人であると言った。しかしこれは元老議員ルブウヒンの反対によって斥けられてしまった。

なおこのルブウヒンは、ドウハボル教徒に勧めて、みんなが一団となってどこかに植民したいということを請願させた。アレキサンドル第一世はそれを許して、トオリダ州のモロチュナイ河に沿うたメリトボル郡をその植民地に指定した。そこにはまだ人の住んでいない肥沃な土地があった。シベリアから帰って来た教徒等は、真先に、そこにヴァオフダーフカ〔授かった神〕の意〕村を建設した。一八〇五年には、カプウステインとその息子とが、タンポフ州やヴォロネエジ州の教徒等を率いて来て、テルベニエ〔忍耐〕の意〕村を建設し、ドウハボル教の予言者はキリストとして全植民地を支配した。そして彼等はその植民地をシロチニア・ヴォディと名づけた。

一八一八年、アレキサンドル第一世は自らこの植民地を見舞った。さすがのドウハボル教徒等も、長い間の追放から許されて、肥沃な土地まで貰って、その上に皇帝の見舞いまでも受け

たのだから、よほどありがたかったものと見える。今でも彼等はその祈禱の中に「長老アレキサンドル」などと言っている。そして、彼等は、皇帝は表向き死んだということにして、実は彼等の間に引こんで、その宗派に帰依したのだとまで言っている。

やがてこの植民地に九つの村ができた。肥沃な土地は彼等の労働と改善とで、ますます豊饒になった。彼等は安楽に暮した。饑饉の時の貯蓄までもできた。みんなは共同して土地を耕し、その収穫は平等に分配した。みんなの儲けた金はカブウステインの許に納めた。

男は青い色の長い着物を着ている。女は指輪も耳輪もいっさいの飾りをつけない。そしてボンネット様の帽子を頭のところで絹ハンケチで結わえている。娘は、その髪を束ねないで、襟のあたりまで、リボンで結わえている。

みんなは互いに兄弟姉妹と呼んで、何事にも助け合って、親密に暮している。老人や不具者はテルペニエ村の養老院に送る。みんな働き好きで、正直で、寡欲で、そしてまたこの規則正しい生活のお蔭で、身体も丈夫でかつ綺麗だ。

時々集まって祈禱をしたり讃歌を歌ったりする。男は右側に、女は左側に坐る。みんなが集まると、一番上席の老人がある讃歌を歌う。次にその次席のものが外の讃歌を歌う。かくして順々に六、七歳の子供にまで及ぶ。女の方でも、同様に、一番年上のものが始めて、順々に小

娘に及ぶ、みんなが自分の好きな讃歌を選ぶ。しかし誰かが歌ったものは二度と歌うことができない。最後にみんなが立ち上って、男は男同士で、女は女同士で、互いに相抱き、相握手する。かくしてみんなの中に生きている神を崇める。そして先きの第一の長老が再び讃歌を歌って、その会を閉じる。

彼等は政府とも和解した。税金も収めた。兵役には、外的にだけ応じた。また、自分が兵役につく代りに、代人を買うこともできた。そしてついには、政府の方でさらに譲歩して、入隊の際の宣誓式をただ忠誠を尽すという約束だけで済ませた。

四

しかるにアレキサンドル第一世も、その晩年に及んで、すなわち一八二〇年頃から、ドウハボルに対するその態度を一変した。そして次のニコラス一世に至って、彼等に対する迫害が復活された。ニコラス第一世はその専制帝国の中にドウハボルという自由自主団体の存在を許すことができなかった。それに兵役の問題について絶えず何かの紛擾が起ることから、なおさらこの宗派に敵意を持つようになった。

一方ドウハボルの方でも、いっさいの暴力を否定するという思想と意志とが、ますます明らかにされかつ固められて来た。たとえば、一八二九年のトルコとの最初の戦争の際に、ヴォラ

ゴドスクの連隊が一大決戦を試みようとしたことがあった。しかるにこの連隊内の数十名のドウハボル教徒が断乎としてそれに与かることを拒んだ。そしてこの教徒等は、両軍の戦線の間へ突っ立たせられてロシア軍とトルコ軍との十字砲火をあびせかけられて讃歌を歌いながら虐殺されてしまった。

ニコラス一世は、かつてドウハボル教徒等に与えられた土地を削って、彼等に対するきわめて嚴重な処刑令をつくった。そして多数の教徒をシベリアの極寒地方へ追放した。しかしそれでもなお不十分だというので、ついに一八四一年に、モロチニア・ヴォデイのドウハボル等をすべてコーカサス地方へ逐い払うことにした。コーカサス地方は、新領地になったばかりで、まだ徴兵令が布かれてなかった。

当時ロシアには、モロチニア・ヴォデイの五千の教徒の外になおあちこちに散らばっている三千ばかりのドウハボルがあった。彼等はみな、一八四一年から一八四五年の間に、一団ずつコーカサスのモクリア・ゴオリ高原地方に送られた。

この高原地方は、海拔五千尺の、酷烈な氣候の不毛の土地であった。

老人の多くは、かつて未耕の地方に移住して、すぐ自分等の労働で富饒な田畑をつくり上げた記憶を持っている。それに彼等は、神に選ばれた人々として、常に神の保護を受けるものと

信じていた。よし石の上に種を播かなければならぬことがあっても、必ず立派な収穫があるものと信じていた。しかしこんどの新追放地はどうてい耕作のできる土地ではなかった。彼等はそのお得意の農業を断念しなければならなかった。

幸いにこの高原地方は牧草に富んでいた。彼等はすぐに家畜の飼養を始めた。そしてその団結と、その精力と、その忍耐とのお蔭で、たちまちの間に幾つかの繁昌な新牧畜村をつくり上げた。みんなは、その財産を共同にして、共同して働き、共同して富を集めた。

近隣のマホメット教徒等も、彼等を敵視する代りに、かえって敬意を寄せた。彼等の柔和と勤勉とはこれらの土人を心服させるに十分であったのだ。彼等は、正統派の人々をその近村に持ったモロチニア・ヴォデイの植民地におけるよりも、かえってこの新追放地の方が気楽に感ぜられた。ここでは、彼等を見張っている下廻りの役人の外には、別に恐ろしいものもなかった。しかしこの役人等とも、その富を利用してできるだけ衝突を避けた。

そしてこの安楽な生活とともに、政府との交渉もよほど穏やかになった。一八七七年のトルコとの戦争の時には、道路をつくって軍隊輸送の便を謀ったり、傷病者の看護をしたり、パンを焼いたりなどして、男も女もずいぶん政府のために尽した。

カプウステイン家は依然として彼等の間の権威であった。カプウステインの曾孫ピョートル

が死んだ。子になかった。遺言によって、その妻のルケリア・ワシリエフナがその後継者になった。策略もありまた熱誠もある女丈夫であった。信徒からその手に集まって来る多額の金をふり播いた。役人ともごく細心にまた巧妙に掛引した。信徒等は喜んだ。そして「どんな病気にかかっても、まだどんな災難が来ても、きっと彼女はその子供等を救ってくれるに違いない」と言つて、その恵みを讃めたたえた。

ドウハボル教徒等は、コーサスに移住して以来のその生活の安楽から、本来の嚴重な道徳をよほど緩めて来た。享樂の味を覚えて来た。煙草や酒を絶対に禁ずることをその道徳の一つと認めないものまでが出て来た。婚姻といえ、ただ相愛する二人のものの結合に過ぎなかったのが、酒宴や奢侈の口実になった。ルケリア・ワシリエフナはこの墮落を慨いて、熱心にその教義の尊嚴を説いた。信徒等もそれに服した。そしてますます彼女を尊敬した。「ルケリアは読むことも書くこともできないが、われわれの宗派をその本當の道に導いてくれた。ルケリアの支配以来、ドウハボルの中から事を裁判所に訴え出るものが一人もなくなった。人の物を盗んだり人を殺したりして監獄に入れられるものが一人もなくなった。人の門口に立って物乞いをするものが一人もなくなった。」

かくして彼等が「その本當の道に帰る」とともに、さらに熱烈に彼等の宗教心を煽った一事件が起つた。そして再び受難の時代が始まつた。

一八八六年十二月二十六日、ルケリア・ワシリエフナが死んだ。彼女はその晩年に、ピョートル・ヴェリギンという賢明なそして敬虔な一青年ドウハボルに、その宗派の支配を助けさせていた。彼女はこの青年に首領としての勤めを稽古させていた。そして彼女は幾度か彼をその後継者とする意志を公然発表した。したがって彼女の死とともに、教徒の大多数はこのピョートル・ヴェリギンをその首領として仰ぐことにきめた。しかるにそこに一と騒動が持ち上つた。当時彼等の植民地は、ずいぶん富欲なものであった。養老院の共同資本だけでも五十万ルーブルに達していた。そこでルケリアの兄弟のグバノフというのが、普通の民法に従つて、自分がその相続者であるということを主張し出した。そして裁判所に訴え出た。教徒は二派に分れた。幾年かの争論の後について裁判は少数のグバノフ派の勝利に歸した。

多数派のドウハボルは、事の曲直を裁判所に争つて、その教義に背いたことを後悔した。この事件を神から下された試みとして受けなかつたことを悲しんだ。そして、新たに十万ルーブルの新資本を集めてそれをピョートル・ヴェリギンに委託し、お互いの私有財産を平等にして、さらに厳格な教義通りの生活に歸つた。

ピョートル・ヴェリギンは煽動者としてアルハンジェル州のカラへ追放された。教徒の崇拜はますます高まつた。そして彼は、その追放地から、彼等の新運動を指揮していた。彼はさらにシベリアのオブドルスクに移された。そして途中のモスクワで二人のドウハボルの見舞いを

受けて、その伝言を授けた。財産の共有、宣誓の拒絶、殺生禁断、したがって肉食と兵役との忌避、これが、ピョートル・ヴェリギンのその信徒等に言い送った、勧告であり、また命令であった。

一八八六年以来、コーカサスに徴兵令が布かれた。ドウハボル教徒等は、心ならずも、形式だけはこの法令に従っていた。ヴェリギンは、その信徒等に、彼等の所有するいっさいの武器の破壊を勧告した。

五

一八九五年六月二十八日から二十九日の夜にかけて、すなわちピョートル・ポールの聖日の前夜、世界の歴史に唯一な一事件が、コーカサスのドウハボル村の間に起った。

彼等は自分等の持っている武器という武器をすべて焼却して、いかなる迫害に遭っても、無防禦であり無抵抗であることを表白しようとした。彼等はまずこの聖日を選んでピョートル・ヴェリギンの祭をした。そして、ティフリス州とイエリザフェトボル州とカルス地方とで、同時にその計画の実行に取りかかった。

カルスでは、老人等の計略で、警察の眼を眩ますために四カ所に焼き場を設けて、その中どれが本当の焼き場かということは、仲間のものにも秘密にされていた。で、その計画も無事に

行われた。

イエリザフェトボル州では、警察の干渉はなかったが、事が大ぶ悲劇的に行われた。みんなが、人類のために有益な一大事を決行するのだという自覚を持っていた。その事件が「全ロシアに、全ヨーロッパに知れ渡る」ことを望んでいた。

ティフリス州のアハルカラキのドウハボル等は、やはりそれと同じ考えで、彼等が平素聖場のようにしている洞窟の前に集まった。グバノフ派の村民等は何か自分等に復讐の企てでもあるのかと思って、驚いて官憲に密告した。ヴェリギン派のドウハボル等は、小刀の外のいっさいの武器を集めて、それに二十車の石炭と焚木とを積みあげて、石油を注ぎかけて火を放った。「まるで昼のように明るかった。やがて恐ろしい爆発の音が始まった。火の中の多くの鉄砲には弾丸がこめてあったのだ。その鉄砲の持主等はみんなに遠く退いてくれと頼んだ。しかし誰も承知しなかった。不思議なことには、一人もその弾丸で傷ついたものはなかった。みんなは祈禱をあげて讃歌を歌っていた。そして朝になって分れ分れに村に帰って、何事かを待っていた。」

この洞窟から一里ばかりのグバノフ派の住んでいるオルロフカ村では軍隊に動員令が下っていた。

七月三十日、ドウハボル等は再び焼き場に集まった。州知事は彼等をボフダノフカの自分の

前に来るようにと命じた。彼等は答えた。「私どもは今祈禱をしているのです。どんな命令があっても、この祈禱をやめて、それに従うことはできません。」最初の使いに続いて第二の使いが来た。ドウハボル教徒等も、祈禱が済んだら、知事のところへ行くことにきめた。突然そこへカザック兵が飛び込んで来た。鞭や棒杭でめった打ちに殴りつけた。群集の中ほどにいたものは自ら進んで前列に出た。ついに彼等はポフダノフカへ引きずられて行った。女等もそれに随いて行った。カザックはそれを男等を引き離そうとした。女等はどこまでもその兄弟等と一緒に行くと言って聴かない。殴りつけられる。ますます叫んで止まない。ついにカザック等も放任して置くより仕方がなかった。

ドウハボルは途々讃歌を歌って行った。ポフダノフカの近くに來ると、知事がやって来た。カザックはドウハボル等に脱帽を命じた。彼等は応じない。再び惨劇が始まった。「草が血で赤くなった。」

知事は「もしみんなが、グバノフ派のドウハボルのようにお上の言うことを聴けば許してやる」と言った。再び彼等は応じない。知事は即座に銃殺すると言って脅かしつけた。カザックは構え銃をした。ドウハボルは動かない。ついに彼等はその村に送り返された。

二百の兵士がドウハボルの村々に派遣された。彼等は凌辱と掠奪をほしのままにした。教徒

等は少しも抵抗しない。その一人のもと兵士であったワシア・ボスニアコフは、士官に敬礼をしなかったというので、二週間身動きもできないほどにひどく殴られた。女どもは逃げ隠れた。ある村では、夜になるとみんな穀物倉の奥に身を潜ませた。

しかし、そうまでも少しもドウハボルの決心が鈍る様子も見えないので、政府は一策を案じ出した。すなわちもともと頑固らしく思われる四百六十四家族を、アハルカラキ村からゲオルギ地方に追放して、一村に二、三家族ずつ置いてその間の交通を禁じた。

一坪の田地もあてがわれていない彼等は、日傭取りの仕事でもする外に仕方がなかった。それでも彼等は、金持のためにはごく安い賃金で、貧乏人のためには無報酬で、よく働いた。ある日、一人の村民が麦を打っている間に病気になるて倒れた。雨が降りかかっていた。それを見たドウハボル等は、代りにその麦を打ってやって、倉の中に蔵いこんで、その男のお礼を言おうとするのを見向きもしないで行ってしまった。またある時、村民の一人がドウハボルの馬を盗もうとした。ドウハボルはそれを見つけて声をあげた。村民はうろたえて立ちどまった。

「待てと言ったのは、お前さんがこの馬を盗んだのだと思っちゃいけないということを、一言お前さんに言いたかったからだ。この馬がお入用なら持って行くがいい。」村民は黙ってその馬をもとの厩に連れて行った。

彼等はまた、お互いのことにも、ごく深切で思いやり深かった。彼等の中の誰かが…兵役…

に応じたという話を聞けば、嘆きはするが、しかしその若者のことは憐れんだ。「可哀相な男だ。今までもずいぶん苦しんだのだ、が今からはもう一層苦しまなくちゃなるまい。」

貧窮の上に病気が来た。恐ろしい瘰癧病と眼病とが襲うて来た。眸がぼんやりと霞んで、白い星で掩われる。かくして三年の間に、四千人ばかりの間から一千人の生命を奪われてしまった。

その村に残っていたドウハボルもずいぶんと苦しめられた。その村々はたちまちの間に疲弊した。しかし彼等は、自分等の義務だと思ふことには、相変らずの不屈不撓の精神を保っていた。誰かをビョートル・ヴェリギンの許に見舞いにやろうという相談が起った。そしてイワン・オプロンモフという男がその任に当った。彼は一八九六年五月二十四日にその村を出た。兄弟等は、旅費の残りをヴェリギンに送るようにと行って、二百五十ルーブルを与えた。彼はオブドルスクから三百里ばかり行って捕まった。旅行券を持っていないというので監獄におし籠められた。持っていた金も、できるだけ多くヴェリギンに渡そうと思つて儉約に儉約を重ねて来た甲斐もなく、没収されてしまった。そして一年の後にようやくコーカサスに帰つて来た。

「私はビョートル・ヴェリギンに会うことができなかったことを仲間へ報告した。するとこんどはアンドロゾフが送られた。これも途中で捕まつてカルスに送り歸された。さらに三人目の

使いが出た……誰かが終いには行き着くに違いない。われわれには、十一年以来牢にはいつてゐる罪もない一人の人間のことを、忘れたり放棄したりする権利がない。」

…兵役拒否…のために懲治隊に送られるものも続々として出た。そしてその中でのもっとも頑固なもののはさらにヤクトスク地方へ追放された。

六

ついにドウハボル等は、ロシア国内に生活することができなくなつて、国外に移住する外に仕方がなくなつた。ビョートル・ヴェリギンもそれに同意した。そしてイギリスやアメリカのクエーカー教徒や、トルストイなどの同情者が現れて来た。

ビョートル・ヴェリギンはその追放先きで初めてトルストイの存在を知つた。その作物を読んで感激させられた。トルストイの方ではその以前から彼等の運動およびことに最近の受難の有様をよく知つていた。一八九五年に、自らその実情を視察するために、コーカサスへ出掛けた。そしてそれ以来、その文章や金銭によつて彼等を助け、また友人としての忠告もするようになった。ビョートル・ヴェリギンも、トルストイの作物を読んで以来、絶えず彼と音信を交わすようになった。

ヴェリギンは皇后アレキサンドラ・フェドロフナに一書を送つて、皇帝がドウハボルの外国

移住を許可するように骨折を願った。この請願書というのがすこぶる奇妙なものであった。クエーカー流に、皇后のことを「お前さん」というふうに呼んでいる。皇后の尊貴というようなことは少しも念頭に置かれていない。しかしごく丁寧には書いてある。すなわちその教義に従って、彼女の人間としての品位は十分に尊んでいる。自分等の地位についての悲嘆もなければ、また迫害者に対する批難もない。すべてがただ人間としての慈愛に訴えたものであった。しかしこの請願書には何の結果もなかった。長い間そのことは皇后にも秘密にされていたのだ。しかるに一八九七年に、皇后がその子の病氣見舞いにコーカサスへ来た。ドウハボルはこの機会を利用して、同じ意味の請願書を皇后に呈出した。そしてついに、翌十二月、再びロシアの国境内に帰らないという条件の下に、国外への移住を許されることとなった。

ドウハボルは非常に喜んだ。そして以前からいろいろと同情してくれたクエーカーに助けを乞うた。クエーカーはすぐにロンドンに「フレンド協会」を設けて寄附金を集めた。トルストイも「ドウハボルのために訴う」という檄を飛ばした。かくしてたちまちの間に三万ルーブルばかりできた。ドウハボルの方でも四万七千ルーブルをつくった。

しかしまだヴェリギン派の信徒をみんな移住さすには金が足りなかった。そこでまずその中で一番困っているものだけをイギリスのどこかに送ることにきめた。サイプラス島がよかる

うとなった。これより先き、フレンド協会への代表者としてロンドンに派遣されたピョートル・アホトとイワン・イウインとは、この島を訪うて見て、そこはとてども駄目だと言って来た。しかしみなはもうこの上待つことができなかつた。一千二百二十六人のドウハボルは、最後の家財家具を売り払って、パトウムに集まった。ロシア政府はこの移民等を捕えて満州へ追放する、という風評まで立った。みんなは大急ぎでイギリスへ発った。

はたしてサイプラス島は駄目だった。着くとすぐに彼等の多くは熱病に悩まされた。暑い不健康な土地だったのだ。彼等はさらにクエーカーに手紙を送った。「われわれがここに落ちつくためにもうこの上たくさんな費用をかけて下さるな。そしてもしその費用ができるなら、もつとわれわれの生活に適したどこかへもう一度移して貰いたい。うわさによればカナダがいいということだ。——もつともわれわれの仲間はまだ多勢コーカサスに残っていて、そこで苦しみぬき困り切っている。で、まずその人達の方の御心配を願う。」

コーカサスに残っているドウハボルの中には、ゲオルギ地方の村々に散らばっている、本当に苦しみぬき困り切っている二千あまりのものがあつた。まずそれを救わねばならない。そしてその費用はトルストイのお蔭でできた。

当時トルストイは、『アンナ・カレニナ』よりのまったくの想像で捏ね上げる作風を放棄し

て、その新芸術観による長篇『復活』を書きかけていた。彼はその草稿を未完のままでも売った。トルストイがチェルトコフに送った手紙の一節に言う。「かつて私の『カザック』という小説の時にはやはりそうだった。私はその完結を待つことができなかった。当時私はカルタで大損をして、その負債を払うために、この小説のある新聞社へ売った。しかしこんどはその理由はもっと遙かに高貴なものだ。」なおトルストイは幾多の短篇小説を外国の諸新聞に発表した。そしてその収入の全部をドウハボルに献げた。その外にも多額の金を友人の間から集めた。

カナダは移住には最上の土地であった。土地は肥えている。地価は安い。それにカナダ政府は、ドウハボルの信仰の自由を尊重して、兵役も免除すると約束した。

一八九八年十二月、クエーカー等は一汽船を備入れて、二千六百人のドウハボルをカナダに送った。さらに翌年一月、第二の汽船によって、まずロシアからの一千七百人を、次にサイプラス島から一千人余りを送った。この費用はクエーカーとロシアのある二人の貴婦人などが受け持った。そして最後にカルス州からの二千八百十八人が、自分達の費用でカナダに渡った。

かくして一八九九年の夏には、カナダに七千人余りのドウハボルが集まった。そしてその中の一千四百人はサスカチエワン河附近のアルベルタに、他はヨークタウンとスワン河との間のアシニボイアの南北の二箇処に、各々の植民地を構えた。

カナダには広大な未墾の土地があった。政府はドウハボルの寡婦と十七歳以上の男子とに各各百六十エーカーの土地を与えた。それに四方からの援助もあった。汽船会社はカナダ政府から受取った移民一人に五ドル宛の金を移民委員に返して寄越した。かくしてドウハボルの共同金庫の中に三万五千ドルの金がいっぱいあった。フィラデルフィアのクエーカー等は牛馬だの鋤だの種子だのを送って来た。トルストイも五千ドル送って来た。その他、スイスやイギリスやロシアから、個人としての寄附が大分あった。

しかしドウハボル等は、この寄附金でいつまでも生活して行くこともできず、またそれを望みもしなかった。彼等はすぐに勇敢に仕事を始めた。畑をつくったり家を建てたりするだけでは足りない。毎日の生活の金もとらなければならぬ。男はそこへ鉄道や坑山や小作の仕事を求めに出た。女はうちで、家を建てたり、鶏の世話をしたり、自ら鋤を引いて耕したりした。食物は不十分だ。ある村では三週間塩がなかった。駄獣のような仕事の後に、その精力を回復するための食物といつては、往々パンと水としかなかった。一八九九年から一九〇〇年にかけての冬はずいぶん厳しかった。それに病魔が襲うて来た。薬はなかった。

七

が、その翌年の冬からは、その生活も大ぶ楽になった。家の数も増えて、借金も減った。と

同時に、その生活方法を変える必要が生じた。みんなが一と塊になって大きな村に集まっていることが不便になった。あちこちに小さな村ができた。あるところでは一と家族ずつ別に分れた。と同時にまた、その道徳にも多少の変化が起った。

アシニボイアの一ドウハボル、ニコラス・ツイバロフが一九〇〇年十一月に次のごとく言っている。「われわれの生活は神のお蔭でだんだん善くなって行く。物質上の欠乏もあまり感じない。要るものは得られる。……しかるに靈魂の生活においては、われわれの間にはもう昔の結合がない。あるものは神の教えを棄てて、自分自身の思うままに振舞っている。……確かにやがてわれわれの間に分裂が来るだろう。」

実際、このドウハボルの中でも、自費で渡航して来たアルベルタの植民等の間には、よほどその宗教的感情が薄らいでいた。しかし、先方にコーカサスでもっとも苦しんで、やがてサイラス島へ絶望的移住を企てたものらの間には、まだその宗教的感情が盛んに燃えていた。ニコラス・ツイバロフは重ねて言う。「われわれの間には、まったくキリスト教的に生活して、キリストの教えを外面だけではなく内心から守っている人々がある。しかしわれわれの間のみくは、このカナダに移住して来て以来、確かにまったく変ってしまった。永遠の生命などということを考えなくなった。長老の一人のごく富裕なワシリ・ポボバは、みんなが怠惰や睡眠に耽らないように、傲慢や憎悪に陥らないようにと、泣きながら説教している。」

トルストイも、彼等が平穩無事な生活の誘惑に負けないようにと、しきりに勧告した。そして彼等が、一緒に労働して、一緒に同じ生活を送ることをしないで、別々に離れて生活している危険を説いた。

やがてその反動がヨークタウン附近のドウハボルの間に起った。一九〇〇年六月、「ユニヴァサル・ブラザーフッド会」の委員から、植民地の制度に関する次の意味の三条の改正をカナダ政府に請願した。

一、私有財産は「明らかに神意を侵害する」ものである。故にわれわれドウハボルは、カナダ政府がインディアン族に施行しているがごとく、土地を個人的に分配せずして一とまとめて譲与せられんことを請願する。

二、婚姻は「男と女との精神的索引の純粹な感情によつてのみ」正当のものである。これを民事の記録の上の登記に変えてしまうのは、同じくまた神意の侵害である。故にわれわれドウハボルは、「神と良心との領域内のものであるこの夫婦の結合に関して、何等人為的の制度の下に」置かれざらんことを請願する。

三、民事の記録に出生や死亡を登記するのも、同じくまた神意の侵害である。「天に在す父は、何ものをこの世界に送り、何ものをこの世界から退けたかを、よく知っている。」この神意

のみが人間にとつての必要なかつ肝心なものである。

トルストイの忠実な弟子であり、かつドウハボルの移住委員の一人として熱心に彼等の世話をしたアイルマー・モード氏は、彼等に忠告して、カナダ政府の要求するそれらの小形式が決して彼等の信仰の自由を碍げるものでないことを説いて聞かせた。しかし彼等は一步も譲らな。彼等は答えた。「かつてわれわれは、ルケリアの相続について、法廷に争って、神の掟を人為の制度の犠牲にした。そしてその結果、容易に恢復することのできなかつた良心の攪乱を来たした。」

翌年一月、カナダ政府はドウハボルのこの請願を拒絶した。「法律はカナダのいっさいの住民に同一のものである。万民が等しく負わなければならぬものである。ドウハボルのためにのみそれを変更することはできない。」

ドウハボルは再び請願書を呈出した。「諸君とわれわれとの間には、生活の意義および目的についての意見の相違がある。したがって政府がわれわれの希望を満足すべし、その法律がわれわれの生活の中に侵入するのを制限することは、われわれが(五字)をわれわれの生活の指導者として仰ぐのと同様の困難であろう。……そこでわれわれは、われわれの定住すべき他の土地が見出されるまで、もしくはキリスト教にもとづく生活を送ろうとするものにはこの地上に棲息する余地がないということがわれわれに分るまで、しばらくこのカナダにとどまっている

ことを許していただきたい。」

政府はこの無益なうるさい問答に終りを告げようと思った。そして七月に、ドウハボルがモード氏やクエーカー等の温健な忠告に反対することの遺憾な旨を述べて、ただちにその与えられた土地を受取るべきことを促した。「もしそうしなければ、この上土地をあげて置く訳に行かない。ほかのものをやって住まわせる。」それでもドウハボルは頑として聞かない。「どうしても一人一人の名で土地を登記しようと言うのなら、そうするがいい。……しかしわれわれは土地は分割することのできないものなのだ。……われわれはみんなが一軒の家のもののように生活する。」

かくしてついにドウハボルは、このカナダでその希望する絶対的独立を得ることができないで、「人類に訴う」という一文をあちこちの同情者に送った。彼等がその良心の掟のままに生活し得るところがあつたらどこでもいいから知らしてくれ、ということに依頼したものであつた。が、どこからも何の反響もなかつた。

八

その後このドウハボル等はどこへ行ってどうなつたか。それは正確には分らない。カナダからの報道も、はなはだ不完全なもので、往々矛盾もあり、またその多くはある小団体について

の消息で、それによってドウハボル全体のその後の生活を知ることができない。

もっとも多くのものは比較的に自由なカナダ政府の制度に妥協したらしい。勿論ほかのどこへ行っても、これ以上の善い国はあるまいと考えて、そのとても実現されそうにない夢想の幾つかを棄てて、そこに定住したらしい。

しかし他の多くのものは、個人の資格で土地を貰うことにあくまでも反対して、ついに南アメリカやその他の諸国に移って行つたらしい。このドウハボル等のその後の消息はほとんどまったく分らない。

ただ一九〇三年一月に、ドウハボルのある一団体から出た、トルコ皇帝への次のごとき手紙が発表された。

「陛下よ。われわれは陛下の好意に訴える前に、まずわれわれ自身について語る。われわれは、一八九八——一八九九年に、七千人の同胞とともに、ロシアからカナダに来たものである。われわれはこのカナダが宗教的自由の国であると聞いていた。しかしそれは間違いであった。なるほどカナダはある程度の自由はある。しかしそれはわれわれの求めていた自由ではなかった。

「われわれは神がこの世界を支配するものと信ずる。神の命令(四十五)われわれは神の臣民である。カナダでわれわれの信仰のままに生活するという希望は外された。もっとも兵役には免

れた。武器を携えることと、同類の生命を侵すこととは、われわれの禁断である。しかしその他のいっさいにおいては、われわれは神の臣民ではなくイギリスの臣民たらしめられようとした。カナダの法律と規則とに従わなければ土地も与えられない。

「われわれは神の前で誓った。それはわれわれには不可能のことである。われわれはむしろ、われわれの(十九)いと。

「そこで、今われわれは陛下の好意に訴えて、われわれの家族およびわれわれの子供に憐愍を垂れ給わんことを、皇帝としてのみではなくことに人間としての陛下にお願いする。われわれは、この地上における神の漂浪者として、陛下に乞うて陛下の大帝国の中に一避難所を求めたい。

「われわれはただ、陛下に一隅の土地を求めて、(三十五)られることもなくして、そこでわれわれの手で労働して行きたい。

「なお附加えて言う。われわれは肉も乳も卵も食わない。われわれの食物はただ野菜と果物とのみである。生けるものすべてに自由を与えんとするわれわれには、人間にのみならず、動物にすらも害を加えることはできない。われわれは何等の家畜をも使用しない。われわれのいっさいの労働はわれわれ自身の手から出る。

「さればわれわれは、家畜を使用せずして耕作し得る土地を陛下がわれわれに下し給わんこ

とを願う。われわれはその土地をわれわれの生存のために田畑と菜園とに開拓する。

「われわれのための好意を陛下の御心の中に注ぎ込まんことをわれわれは神に訴える。そしてわれわれは、われわれのこの願いが利害によってではなく、ただ神に忠実ならんとする渴望から出たものであることを神に誓う。」

ピョートル・ヴェリギンは、一九〇二年にシベリアでのその刑期を終えて放免され、翌年一月ロンドンで講演会を開いた。

ヴェリギンが再びドウハボルの運動の牛耳を握るようになるか、それもまだ分らなかった。彼自身もかつて彼等の間に持っていたその勢力が今どうなっているか知らなかった。「私はもう十五年間も兄弟等を見ない。彼等が今なお私の言葉を聞きたがっているかどうか分らない。」しかしヴェリギンの主張とその行動とは、ドウハボルの運動の上にさらに新しい活気をもたらした。彼はその兄弟等はカナダ政府の処置にあくまでも反対しなければならぬと説いている。私有財産や、民事的婚姻や、出産死亡の登記についても、いっさいの譲歩を斥けている。そして絶対的貧窮が精神的自由の必須条件であると認めている。

もっとも彼自身は言う。「私はドウハボル村のただの一員に過ぎない。彼はその兄弟等の上自己の何等の權威をも認めていない。その教義の神髄は、人間が人間の上に持ついっさいの

権力の否定にある。

なお先年、ツァーの政府が倒れてケレンスキー内閣が立った時、オタワ来電として、西部カナダにある約一万のドウハボルが、革命の成功を機会として本国に帰化したいと願いだした、といううわさがあったが、そしてロシアの新政府はそれを許したということであったが、はたしてその後はどうしているか。